

混沌とした中から

混沌とした世界にどっぷり浸かって (5)

実は、時期が前後するのですが、出向に行く前の年に結婚したのですが、そのけっこんのどさくさにまぎれてパソコンを購入していたのです。お金もなく新婚旅行も近間で済ましたというのいろいろあったのですが、このときとばかり購入したものです。で、そのとき購入したのは富士通初めてのパソコン「FM-8」です。そのときですでに2台目のコンピュータとなるわけですが、PC8001も発売となっていたのですが、H68-TRがCPU6800であったことから同じ系列の6809のCPUであること、2CPU（1つはメインでもう1つがグラフィック対応、とうことはこの頃のパソコンはグラフィックもメインCPUが処理していた 実はキーボードにワンチップが入っていて3CPUともいわれていた）であること、メモリが64kB(PC8001は16kBから増設)実装済みであり、漢字は表示するし、画面はカラーだしといったことから選択したのだと思います。それまでのH68などがアセンブラ中心であったのに対して、パソコンになってからBASIC中心になっていました。外部記憶はもちろんカセットテープです。そこでカセットテープによるデータ保管の話です。

最初のワンボードマイコンの頃中心だったのがカセットですが、それにも標準がありました。それが「カンサスシティスタンダード」です。カンサスシティスタンダードはその名のとおりアメリカのカンサスシティでの会合で規格化された周波数偏調方式でデータを音声に変換して録音するもので、速度は300ボー(600bps)が中心でした。しかし、正直なかなかうまく読み込みができなかったことと、ファイルに名前を付けることができなかったので、カセットテープをまず巻き戻しして、カセットレコーダのカウンタを「0000」にして、このあたりと思うところまで早送りして読み込むということをやっていました。それでも実際に動かしてみないと合っているかどうかわからなかったので手探り状態でした。それが、FM-8などが出る頃にはサッポロシティスタンダードという方式が出ていて、これが1200ボーで早くて読み取りが割りとうまくできるというのが売りでした。確かちゃんとファイルに名前も付けられたので、ファイル名を指定すれば指定したものだけが読み込めるというので、重宝したものです。しかしそれでもうまく読み取ることができないこともあったりして、テープレコーダを買ってきたこともあります(この頃パソコン用にスイッチ切り替えできるものが発売されていました 買ったのは普通のものでしたが)。カセットテープもパソコン用に5分や10分のものでありました(その後同じぐらいの長さのものがカラオケ用となっています)。H68の時代からカセットを使っていたのですが、結構テープを持っていたようです。

その時代もしばらくするとやはりカセットでは耐え切れなかったのか、多少お金に余裕が出てきたのかフロッピーディスクドライブを購入しました。それとプリンタも購入してフルセットをそろえました。もちろんプリンタはドットインパクトの白黒のものです。ディスプレイは初め普通のテレビにつないでいたのですが、専用を買ったのではなかったでしょうか。この頃のフロッピーは5インチです。1枚で640kB(2DD)の容量がありました。もちろん純正ではなくサードパーティのものでしたが、フルセットで40万ぐらいにはなるのではないのでしょうか。この頃のフロッピーは5(5.25)インチのもので、8インチのものも使われていました。三菱のMulti16や沖のif-stationの外部記憶装置として純正として8インチのものでしたが、この頃パソコン用として5インチが出てきた頃です。

(次回へ続く)

(今週の情報誌から)

○日経パソコン 12月6日号

特集 2005年モバイルの旅

→モバイルパソコンが本当にやってくるのか。ビジネスマンがこれからいっそうパソコンを持ち運ぶが増えてくるのか。普及が進まない理由は、日本の仕事のスタイル（他の人が見ている社内で働いているところを見せたほうが仕事をしていると思われる、アピールができるなど）、会社のPCに比べ遅い、1kgでもまだ重いなど3つのわけがある。しかし、ネットワークがどこでも使える（PHS、携帯から無線LAN）状態になり、軽量化、高性能化が進んで、2005年はモバイルの年になるか。しかし、個人情報の兼ね合いもあり、いたるところで使うことが果たして大丈夫だろうかという疑問は個人的には残るが。